

集団就職

後藤 次郎

昭和三十五年、中学卒業後、大阪の鉄工所に就職が決まり、徳島港から天保山行きに乗船した。眉山が月明かりを浴び黒い陰影を残していた。空には宵の明星が赤く輝いていた。薄暗い港は寒風が吹き、底冷えする甲板で無言のまま学生帽を深く被り、多くの級友に見送られ、呼び声にも応えず、ただ五色のテープを握りしめていた。

私は朝刊掲載の高校入試問題を持っていた。音楽の主な出題はドボルザークの「新世界から家路の部分」であった。この曲が一番好きだった。当時の高校入試は音楽や保健体育等九科目が出題されていた。

担任の先生から、

「早く働いてお母さんを楽にしてあげなさい」と言われ、

母は泣きながら

「お願いだから働いて」と頼まれた。

私は死ぬほど高校へ行きたかった。中学二年の夏までは学年三百六十人中三百二十番程で、成績順のクラス分けでは最低のFクラスであった。だけど、倒産、生活保護等家庭の事情で転校してから目覚めて頑張り、俄秀才と言われるまでになった。

担任の先生から養成工の試験を受けてみないかと勧められた。当時の大企業では企業内高校があり、働きながら学べる養成工という制度があった。高校卒の資格が得られるので私は喜んで受験した。二名の採用に対して百名を越える応募者であったが合格した。ホームルームで先生から給料を貰いながら高校で学べるから素晴らしいと発表してくれた。

合格内定通知の後に身体検査が行われ、私の右目が見えない事が判明した。それまで私は気が付いていなかった。生まれつき見えないので分からなかった。

哀しさのあまり、自転車を走らせ潜水橋から川へ跳び込んだ。痛さと冷たさで自転車を抱えて川から這い上がった。これまでの人生は何も上手く行かなかった。良い事はほとんど無かった。就職担当の先生に連れられ、多くの企業を廻ったが、眼が悪くという理由で全て断られた。もう何処でもいいと自棄になっていたが、大阪の鉄工所に決まった。

鉄工所は東淀川区の町工場で、住友金属の下請けをしていた。仕事は昭和三十九年開通予定の新幹線のブレーキ部品と車体の台枠の組み立て作業であった。

職場での生活は朝六時に起こされ、毎晩十時まで働いた。日当二百四十円、残業手当一時間三十円、残業の割増賃金も無かった。食事は近くの食堂で朝食三十円、昼食五十円、夕食七十円だった。夕方五時に残業用のうどんと蕎麦が食堂から配達されてきた。その配達少年も地方から集団就職で来ていた。

工場から寮まで帰る道中で毎夜、「家路」のメロディーが町中に鳴り響いていた。青少年に早く家に帰るようにとの動機付けのためであった。寮の二階に今春集団就職した中卒者が二十畳に二十人入居した。頭元に石炭箱と呼んでいた木箱を置いていたので一畳では窮屈過ぎた。一階には故郷に女房子供を遺しての出稼ぎのおじさん達が数人居た。

昭和三十年代の日本はドル三百六十円の固定為替相場で、まだ後進国であった。農業社会から工業社会へ大きく変換していた。地方からの出稼ぎ労働者や中卒の集団就職者は大都市の人手不足解消のために必要な労働力であった。当時の高校進学率は五十%程で、中卒で就職する生徒の多くは経済的理由からであった。今より経済格差は大きかった。

中卒の集団就職者は安価で使いやすく、不平不満も少なく、職場環境に順応した。都会の企業に取っては「金の卵」で、高度経済成長の担い手として、中卒者確保は必須の課題であった。それは国や企業の共通の利益であった。一方、中卒者の健康や人権は無視され、単に安価な「使い捨ての労働力」としか社会はみていなかった。しかし、若い時から手に職を付けて働いたから、腕の良い職人になれたのである。我が国が技術立国日本、イノベーションを世界に誇る事が出来たのは、十五歳から働いた集団就職者の力が大きいのである。

同期で二十人集団就職した内、私が在職した一年半の間に、機械で指を落とした者、アセチレンと酸素で鉄板を切る切断機で足に穴を開けた者、電気溶接のカスを

エアース鉄砲ではつり作業で胸を傷めた者等、消耗品の如く散っていった。ただ、戦後十五年、私達には速く先進国に追いつきたいとの気概や、貧しさから脱皮したいとの強い思いがあった。だから、月間百二十五時間の残業にも耐える事が出来たのであった。

職場では井に盛られた塩を何度も舐め、氷水を飲んで作業をした。鉄を真赤に焼きハンマーで叩いて部品を作った。汗は流れるように掻き、翌日作業服を着ると塩が落ちていた。ヘルメットも無く、手袋は布製のため電気溶接では、手袋が燃え火傷の傷痕が残った。溶接のガス煙で顔の皮が日焼けの時のように剥け、眼を焼き痛い毎日であった。グラインダーでの研磨ではゴーグルも無く、普通の眼鏡を掛けてやるため、鉄粉が目玉に刺さった。眼科で診てもらうことはなく、刺さった鉄粉は切断機の孔を掃除する鋼の長い針でお互いに取り除いていた。眼はいつも真赤に充血し、寝る時は濡れタオルを眼に当てて眠っていた。

現在の外国人研修生制度も安価な労働力確保の点では同様であるが、今のほうがほど楽で優遇されている。今の若者達が派遣社員、契約社員やネットカフェ難民等で社会問題になっているが、これらはグローバリゼーション及び企業の国際競争力の強化等の理由で国及び企業の利益が一致した結果としての社会現象である。一概に若者達が駄目なのではなく、社会的に作られているのである。

人は仕事を通じて自分を高め、仕事の中から道が求められるものである。若者達に仕事を与え、仕事を通じて人間的に成長させることが国や企業の社会的責任である。

昭和三十五年は浩宮皇太子の誕生、全学連が首相官邸や国会へ突入した年であり、戦後の貧困生活はまだ終わっていなかった。集団就職は昭和二十九年から始まり三十九年の東京オリンピックで終わる。「団塊の世代」から上の人達が高度経済成長を支え日本を経済大国へと発展させたのである。それは中卒で集団就職した多くの若者の犠牲の上で成し遂げられたことを忘れてはならないのである。現在はほとんどの者が大卒だから、技術者が育たないし、仕事で人間が磨かれないのである。鉄工所での集団生活は夢も希望も持てなかった。食べて寝るだけの生活だった。ここは「掃き溜めだ」、早くここから抜け出したい。でも「掃き溜め」にも美しい花を咲かせたいとも思っていた。

事務員になりたくて毎朝五時に起き、独学でそろばんの練習と漢字の書き取りを

した。就職してから六ヶ月経った頃、体調を悪くし、徳島へ帰った。母は私を見るなり、

「まるで幽霊みたいに痩せて」と言った。

半年で十キロ痩せ、四十日間入院した。

「会社を辞めて勉強したい」と母に懇願すると、

「半年頑張ったんだから今辞めたら勿体ない」と言われ、泣き泣き大阪へ帰ったが、その一年後に退職し徳島へ帰った。

勉強したい一心から、経理学校で簿記、そろばんを一年半学び、一級の資格を取り、念願の事務員として自動車会社へ就職した。また、夜は定時制高校へ通い、大学進学を志した。

夜間高校卒業後、東京の大学へ進学した。仕送りなしで、バイトをしながら毎日十時間程勉強し、卒業年度に公認会計士試験に合格した。

母の元へ報告に帰ると、

「やっと高利貸しの借金を払い終わった」と言った。私は何も知らなかった。

私は六歳の時、父を亡くし、兵庫県の叔父の家へ預けられていた。母は私と一緒に暮らしたい為、五年後に菓子屋を開業した。しかし素人商売のため、二年で倒産した。深夜に家財道具をリヤカーに積み、住む家も無く、お寺の一室を借りた。その道すがら、

「心配しなくていいよ、ぼくが大人になったら、家を建ててあげるよ」と、母と約束した。

私は三十二歳の時、東京から徳島へ帰省し、集団就職で人生の出発点となった徳島港の辺に会計事務所を開業し、母のために家を建てた。

当時、徳島の中心地では五時になると、唯一のデパートから「家路」の曲が町中に流れていた。事務所の窓際に佇むと、集団就職時代が偲ばれ、心の奥底に響くメロディーが、勇気と希望を与えてくれた。

それから十年後、母は六十五歳の時、私の誕生日に肺癌で死去した。老舗のデパートも時代の流れの中で破綻し、今では「家路」のメロディーを聞くことが出来ない。

仕事を終えて空を見上げると、眉山の彼方に月が昇り、金星が輝き、過ぎ去った日々を回想させながら、ずっと見守ってくれている。

後藤 次郎

69歳、徳島市、中学卒業後大阪の鉄工所へ集団就職。
働きながら定時制高校から東京の大学へ進学。
仕送り無しで大学卒業後、公認会計士・税理士の事務所
を開業。

ホームページ <http://wonder-poems.com>